

つき  
月に對して元九を憶う（白居易）

銀台 金闕 夕 沈々

ひとり 宿し 相思 思うて 翰林に 在り

三五夜 中 新月の 色

二千里 外 故人の 心

渚宮の 東面 煙波 冷やかに

浴殿の 西頭 鐘漏 深し

猶お 恐る 清光の 同じく 見ざるを

江陵は 卑湿にして 秋陰 足る

銀臺金闕夕沈沈 獨宿相思在翰林

三五夜中新月色 二千里外故人心

渚宮東面煙波冷 浴殿西頭鐘漏深

猶恐清光不向見 江陵卑濕足秋陰

解説 作者三十九歳の八月十五日の夜、宮中に一人、宿直して中秋の月を見ながら、

江陵の親友・元稹のことを憶つて作つたもの。

語釈 ※禁中Ⅱ宮中。※独寧Ⅱ一人で宿直する。※元九Ⅱ元稹のこと。※銀台Ⅱ宮城の

門の名。※金闕Ⅱ宮城の門。※沈沈Ⅱ夜の更けていくさま。※相思Ⅱ元稹のことを思う。

※翰林Ⅱ翰林院。天子の詔勅起草する役所。※三五夜Ⅱ十五夜。※新月Ⅱ出たばかり

の月。※故人心Ⅱ故人は友達の元稹をさす。※渚宮Ⅱ池の渚に建っている宮殿。※煙波

Ⅱ霧のたちこめた池の波。※浴殿Ⅱ宮中の湯殿。※鐘漏Ⅱ時を知らせる鐘と水時計。

※清光Ⅱ清らかな月の光。※不同見Ⅱ一緒には見えていない。※卑湿Ⅱ土地が低く湿気の

多いこと。※足秋陰Ⅱ秋のくもりが多い。

通釈 ここ宮中はひっそりとして夜は静かに更けていく。私は一人、翰林院に宿直して

君の事を思っている。今夜は十五夜で、出たばかりの月は澄み渡り、この月を眺めてい

ると二千里も遠くに離れている友を思う心に堪えられない。君のいる江陵の渚の辺にあ

る宮殿の東側では、霧のたちこめた池の波が冷やかなことであろう。ここ宮城の湯殿の

西のあたりからは、時を告げる鐘と水時計の音が夜の深まっていく中に聞こえてくる。

こうした夜ふけに私が君を思っている様に、この月を見て、君も私の事を思っていてく

れるだろうと思うのだが、それでも心配なのは、この清らかな月の光を、君は私と同じ

ように見られないのではないかと言うことである。君のいる江陵は土地が低く湿気も多

く秋でも曇がちであるという事だから。